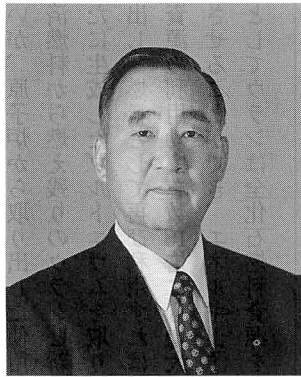


洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
京都市左京区田中大塚町49
075-701-3164

原子力の役割

関西支部長 鷺見楨彦(昭28卒)



一九九五年12月の高速増殖炉原型炉「もんじゅ」でのナトリウム漏洩事故は、日本の原子力政策の推進に大きな衝撃を与えた。

しかし、21世紀のエネルギーを考えると、日本にとって、やはり原子力は必要不可欠であると考えられており、以下に、エネルギー情勢について考察し、原子力の役割について再確認してみたい。

現在、世界のエネルギー需給は、石油価格も安定しており、中短期的には安定して推移するように見

少分はほとんどOPECからの石油で賄われるとの見通しもある。従って、石油危機以来言われ続けているエネルギー源の多様化は重要であるといえる。

天然ガスは、資源の中東への偏在は小さく、消費の伸びは石炭や石油を上回っている。欧州においてはパイプラインで結ばれ、ロシアの豊富な天然ガス資源を利用しており、一方、アジアにおいては、天然ガスの貿易はLNGの形態をとるため、液化、気化設備等のインフラの整備が必要である。但し、液化することにより不純物が除去できるため、環境対策上の利点となっている。

石炭は、産業革命以来、エネルギー源として重要な役割を果たしてきた。石炭は埋蔵量が豊富で、資源は世界に広範囲に分布しており、供給安定性は高い。しかし、そのままでは燃焼により大量の二酸化炭素や硫酸化物が発生し、地球環境問題への影響が大きいため、利用を進めるためには技術的対応が必要である。

更に、エネルギーを考える場合、環境問題の視点も重要である。近年、化石燃料の燃焼に伴い、大気中の二酸化炭素濃度は急激に上昇しており、二酸化炭素等の温室効果ガスの増加は、海面上昇による陸地の減少、気候変化による

生態系への影響等をもたらすものと懸念されている。

日本の一人当たりの二酸化炭素の排出量は他の先進国の水準に比べて低く、発電電力量当たりのSOX、NOXの排出量も極めて小さい。しかし、一九九〇年の関係閣僚会議での二酸化炭素排出量の目標の達成は困難な状態となっており、環境問題の観点からも無制限に化石燃料の消費を増やすことはできないといえよう。

そこで、将来のエネルギー確保のためには、省エネルギーや高効率のコンパインドサイクルの採用等のエネルギー利用の効率化、および、エネルギー源の多様化のための新エネルギーや原子力の利用推進が必要である。

石油危機以降、日本は先進国の中でもトップクラスの省エネルギーを達成してきた。これ以上の大幅な改善は難しいが、一歩一歩着実な取り組みへの期待は高い。新エネルギーとしての太陽光、風力等は無尽蔵に存在しており、有効に利用できれば、温室効果ガスの発生が少なく、エネルギーの安定確保や地球環境問題の観点から重要なエネルギー資源である。

しかし、エネルギー密度が低く、自然条件に左右され安定性に欠けるなど、本質的な要因により利用には自ずと限界がある。また、コ

ストが割高であるため、現在、日本では一次エネルギー総供給の1%程度しか導入が進んでいない。日本の太陽光発電は、近年大幅に導入が進んだが、二〇〇〇年の導入目標量は40万KW程度である。太陽電池は高価であり、変換効率も10%程度で、稼働率も年間12%程度が限度であるため、コストは依然として高く、導入の制約要因となっている。導入促進のため、通産省では設置への補助金を出すとともに、電力会社では余剰電力の買い取り単価を売電単価と同じにするなどの対策をとっている。風力発電については、既に実用化しているが、地点の風況により大きく左右され、日本では、最大でも発電電力量の4%を賅えるに過ぎないとの試算がある。

従って、新エネルギーについては、分散型電源としての役割は期待されるが、供給力に限界があるため電力供給の主軸になるのは難しく、21世紀の供給の柱は、化石燃料と原子力によるエネルギーミックスとならざるを得ないであろう。

原子力発電は、現在、世界で約四百三十基、約三億六千万KWが稼働し、世界の電力の18%、一次エネルギーでは7%のシェアを占め、エネルギー価格の安定化と同時に環境面からも温室効果ガスの

放出の抑制に寄与している。

原子力を進めていくためには、安全の確保を最優先に、技術的安全を社会的安心にし、国民の理解と信頼を得ることが必要である。

そのためには、安全運転の実績を積み、情報を公開、提供していくことが重要と考えている。

また、ウラン資源も天然資源の一つであり、ウラン燃料を原子炉で利用した後、廃棄物として処分するワンスルー利用では、ウラン資源の0.5%を利用するにすぎないが、原子炉から取り出した使用済燃料から燃え残りのウランと新たに生成したプルトニウムを取り出し、燃料として再び利用すれば、資源の利用効率を数10倍にも増大させることができ、エネルギー源としてウランは全化石燃料資源を

凌ぐ可能性を持つ。

従って、日本としては、再処理リサイクル路線を選択しており、この実現により、世界の人類の将来に貢献できるものと自負している。

エネルギー確保は持続的成長を支える重要な柱の一つである。将来のエネルギーの安定確保のためには、エネルギー源を多様化する必要がある。資源問題、環境問題の視点からも、原子力は21世紀の重要である。さらに、世界の将来の世代のためには、ウラン資源を有効に利用できる原子燃料リサイクルを着実に推進すべきであると考えている。

関西電力(株)取締役副社長

大学の動向

大型計算機センター長

堂下修司教授(33卒)

平成8年4月1日、堂下修司大学院工学研究科教授(知能情報学講座担当)が大型計算機センター長に任命された。任期は平成10年3月31日までである。

超高層電波研究センター長

松本紘教授(40卒)

平成8年4月1日、松本紘超高層電波研究センター教授(超高層電波工学研究部門担当)が超高層電波研究センター長に再任された。任期は平成10年3月31日までである。

電子時代出版の未来問う

京都市中京区京都文化博物館長
長尾 眞(昭和34卒)

京都市中京区の京都文化博物館で開催中の「日本出版文化史展・'96京都」にちなんで、シンポジウム「本の過去・現在そして未来―出版のあるべき姿について」(日本書籍出版協会、朝日新聞社主催)が2月3日、同博物館別館で開かれた。出版史や電子図書館の専門家ら5人が、出版の果たしてきた役割を話し合い、マルチメディア出版に象徴される未来像を探った。曲がり角にあるとされる出版文化には多様な可能性があることが、討議を通して浮き彫りになった。

○ これからは「千年単位の大変動」と言われるが、確かにその予感がある。この変化をどう見たらいいのか。

薫り高い話の後で技術論になるが、情報化の波は止めることが出来ない。出版の流れも速くて、たぐさんの本が出せるようになってきた。そういうふうには技術が流れているというか、欲求が流れている。

本には、単に文字が読めれば良いというだけでなく、美的な活字、レイアウト、装丁、さらには所有欲を満たす、などのいろいろな要素がある。そういう要素が、電子媒体の世界ではどうなっていくのだろうか。

電子媒体は、紙では実現出来ない新たな機能を持つ。例えば百科事典を瞬時に引ける、漫画ならば吹き出し部分を音声で聞ける、電子書齋のようなものも作れる……。いろいろな機能があるからこそ、そういう世界が開けていく。紙の本と共存できるかどうかはまだ分からない。

○ 自然科学では情報の意味が異なるのでは。

学術的で価値のある情報とは、人間の頭の中から新しく作り出されてくるものだ。何が大切な情報であるかが分かるには、本などの共有財産としての情報からヒントをつかむ読解力がある。

○ 文字文化、出版文化は生き残れるだろうか。

確かに技術は早く進み過ぎる傾向があり、未熟な利用によって、コンピューター犯罪のような、公害に似た側面も持っている。しかし、道具には使う人の責任も伴う。だから私たちは情報倫理の確立をめざしている。情報技術は二〇一〇年か一五年ごろには成熟されて、

「この辺りでいい」という時期を迎え、本を持つ良さ、活字の美しさを実現することとなる。

(2月9日 朝日新聞より)

教室だより

教官の異動

次のような異動がありました。

中村行宏

平成8年9月1日、N T T 情報通信研究所、高速通信処理研究部長より、電子回路システム講座(情報回路方式論分野)教授に就任。

(昭和42年京大工卒、工博)

多田博一

平成8年9月1日、郵政省通信総合研究所、関西支所ナノ機構研究室主任研究官より、機能物性工学講座(電子材料物性工学分野)講師に就任。

(昭和61年東大工卒、工博)



退官に当たって

佐々木昭夫

平成8年9月



昭和30年に本学電気工学科を卒業、同32年に修士課程を修了後、企業(神戸工業、現富士通に合併)に5年余、カリフォルニア大学バークレイ校博士課程3年、母校に30年奉職を経て、本年3月末をもって退官致しました。この間41年に亘り電子材料、デバイスの教育と研究に従事して参りました。一九五五年から一九九六年の41年間に相当します。これは、電子管発明の20世紀の初めから、量子効果材料が話題となっている現在迄の約一世紀の後半部に当ります。この間の材料、デバイスの進展を概観し、その流れのなかで関与し得た研究を基に「電子の世界の過去と未来」という題目で、退官記念講義を致しました。その概要をここに記し、退官に当たっての挨拶に代えさせて頂きます。

挨拶に代えさせて頂きます。

I 真空場の電子の世界

電子が、人々によって認識されるのは、一八九七年J.J. Thomsonの電子の発見に始まる。その当時の通信の主力は有線によっていた。一八八八年H.R. Hertzによる電磁波の存在の証明以後、これを用いての無線通信が提唱された。有線通信に対抗出来るよう、通信距離を出来る限り長くするための努力が払われた。そのためには、受信感度のより高い検波器が必要であった。この要望に対して一九〇四年J.A. Flemingが、二極管による高感度の検波に成功した。これが一八九〇六年にde Forestによる三極電子管の出現とつながって行く。三極電子管の出現は、微小信号の増幅を可能にし、電子工学の夜明けを迎えることになる。電子管は真空場の電子の利用である。陰極前面の電界強度の微小変化が、真空場に飛び出す電子の数を変え、電流の大きな流れの変化となる。この増幅機構は、約100MHzの周波数にまで応答し得た。この電子管と云う Hartwareの出現がラジオ放送、無線通信、電話、テレビ放送を出現させることになる。色々な周波数が、空中を飛び交うようになり、使用周波数がどんどん

高くなっていく。以下、それぞれの時期に行い得た研究を、◎印に続く斜体の文によって表す。

◎周波数通帯における進行波管雑音指数

◎バラクタ付き反射型クライストロンの周波数変調

◎交叉型マイクロ波管の結合モード方程式の導出

II 結晶場の電子の世界

2-1 元素半導体と化合物半導体

電話機の普及が進むにつれて、電話交換機に莫大な数の真空管が必要となり、真空管のヒータの電力消費、発熱が大きな問題となった。ヒータが無くて電子管のようなデバイスの出現が強く求められた。固体真空管の要望があったものの、トランジスタの発明は、全く別の実験で思いがけなくトランジスタ動作が見付けられた。Geの棒を二つに折り、直ちに元通りに接触させても、電流が元通りに流れ無かった。この究明のために、Geに二本の電極を付けて、Geの表面を調べていたときに、トランジスタ動作が発見された。その後、トランジスタ動作の理論的解析および結晶場における正の電荷のキャリアとしての「正孔」と云う概念が導入された。低抵抗のエミッタ接合から注入されたキャリアが

高抵抗のコレクタ接合を通り得ることが増幅の基になっている。このことからトランジスタは「Transfer + resistor」と云う意味で名付けられた。真空管が電圧制御による増幅であるのに対して、トランジスタは電荷制御による増幅と解釈する方が解り易い。

結晶場における電子質量は、真空場での質量に比べて、等価的に軽くなり得る「有効質量」となる。

しかし真空場における電子の最高速度は、 $3 \times 10^{10} \text{ cm/s}$ であるのに対して、結晶場では、 10^7 cm/s であり、高い周波数での動作は困難であった。そのためマイクロ波領域で動作し得るトランジスタは、一九六〇年代には出現し得なかつた。結晶場によって有効質量が変わる。その値がおよそ10秒の短時間で重くなる現象を利用して、マイクロ波の発振が可能となった。これが遷移電子効果半導体である。しかし二端子デバイスであるため、信号の流れの制御が難しく、その後のトランジスタの性能向上で姿を消すことになった。より高い周波数での動作のみならず、演算速度のより早い動作がデバイスに強く要求されてきた。

◎遷移電子効果ダイオードの増幅条件

◎遷移電子効果ダイオードのバラメトリック増幅条件

2-2 混晶半導体

より高く、より早い動作を求めて、材料面から二つの方向が取られた。一つはIBMがとった超伝導体である。超伝導体の材料は単結晶ではなく、均一な特性のデバイスが得られず、研究、開発が取り止めとなった。しかし材料の基礎的な研究が後程、高温超伝導体の発見につながって行く。他の方向は、複数の化合物半導体を組み合わせ、それらの物性の組合わせから新しい物性を創り出す「混晶半導体」である。バンド幅の大きなGaAsにバンド幅は狭いが電子移動度の大きなInAsを組み合わせて、GaAsより大きい電子移動度を得るものである。混晶半導体は、化合物半導体から異なるエネルギー幅をもつ半導体を得ることが出来る。これが異なるエネルギー幅による接合を可能とし、電子・正孔の運動を制御し得る場を作り出し得た。トランジスタ、集積回路の出現が、後程情報化社会の基をなして行く。

- ◎InGaAs/InPヘテロエピタキシャル成長の実現
- ◎光電子集積デバイスによる光増幅器の提案
- ◎固溶状態の半導体を「混晶半導体」と命名
- ◎光電子集積デバイスの直接・垂直集積方式の確立

◎混晶半導体内に規則性原子配列の理論的存在

Ⅲ 量子場の電子の世界

結晶成長技術の進歩により、一原子層および分子層成長の制御が出来るようになった。その層厚は、大体2.5Åである。量子効果が現われる約数100Åの寸法の構造を容易に実現し得ることになった。そのため、量子効果に基づく新しい物性、デバイスの研究が盛んになった。他方Siトランジスタの集積が行詰ると云う考えから、従来のトランジスタと全く異なる物理現象によるデバイスが希求されて来た。

量子場では、電子は電子波として波動性を示す。波の回折、干渉、トンネル現象が新しいデバイス実現に利用される。さらに量子場では、電子のエネルギーは連続的で無くなり量子化される。そのことは端的に超格子、量子井戸、量子細線、量子ドットによって実現される。量子場は、積極的に光のデバイスに用いられ、良い成果が得られている。

電子デバイスについては、二〇一〇年には、最小加工寸法が0.07μmのSi-CMOSFETの実現されることが半導体のroad mapに予測されている。それを超えるデバイスとして、量子効果を用いたデバ

イスが研究されている。共振トンネルトランジスタが一つの候補として開発努力がなされている。その他、寸法効果に相当するデバイスとして、単一電子トランジスタが研究されている。

◎「有効質量超格子」の提案と理論解析

◎「不規則結晶半導体」の提案

◎「不規則超格子」の実現と光機能の増大

◎ヘテロ成長による島構造の量子ドット利用の提案

◎量子ドットの発光が量子効果によることの実証

◎島構造成長の臨界膜厚の算出

Ⅳ 電子の世界の未来

CMOSFETの集積回路だけがデバイスではない。しかし、それに相当する基本的なデバイスを考えるとき、少なくとも次の項目を満たす必要がある。特に、大容量の情報処理には必要である。

- A、増幅機能を備えていること、
- B、情報が一方に流れること、
- C、常温動作が可能であること、
- D、集積化、一括加工が可能であること。

以上は、デバイスとして利用する側からの考えである。

新しいデバイスを創り出す側からどのような世界を目指せるかは重要な課題である。

1、超、先端、極微、極限、次世代の語句で発想しない。

2、真空場での電子の世界をnanofabrication技術により結晶場の世界に実現する。

3、on-road mapの半導体デバイスに量子効果を持ち込む。

4、デバイス・回路渾然一体となった場の電子の世界を実現する。

5、光子の世界に、(等価的で良い)電子の世界を実現する。

以上の他に、非晶質材料の電子の世界がある。電子は積極的に動くものではないが、結晶場と異なつた世界を展開する。結晶場の保護、光吸収係数の増加、光活性度の変化などである。

◎SiN膜の新物性

◎Si/C膜の新物性

◎液晶の熱光学効果を用いるディスプレイ提案と実証

◎液晶の電気熱光学効果による大形ディスプレイの実現

電子の世界が、真空の場から結晶の場を経て、さらに量子の場、原子寸法の場へと変遷してきた。

そのいずれの時期においても、教育と研究に没頭し得たのは、いつに良き時に、良き場で、良き師、良き同僚、良き研究生、良き理解者に巡り合えたおかげである。ここに厚く感謝の意を表する次第である。

最後に、教室主任の在任中に、電気総合館の冷暖房に関し、関西電力からご配慮を得、盛夏厳冬の折りの総合館使用に役立っていることをご報告申し上げて、御礼に代えさせて頂きます。(昭和30年卒)

京大ー阪大電気系教室

交歓スポーツ大会報告

恒例の京大ー阪大電気系教室交歓スポーツ大会が、7月19日(金の午後、阪大側の主催で行われ、宅間董教授(電気工学専攻長)、松波弘之教授(電子物性工学専攻長)、吉田進教授(電子通信工学専攻長)をはじめ、教職員、学生合わせて80名近い方々に参加していただきました。会場は、本年も関西電力(株)のご厚意により、同社水無瀬体育施設をお借りいたしました。

大会前日には台風が九州に上陸しており、その後近畿地方を通過すると予報されていました。前日から当日の朝にかけて雲行きが怪しくなり、屋外競技が中止になるかと心配されましたが、午後には回復し、大会を無事開くことができました。薄曇りの中、きつい日差しもなく、グラウンドにはそよ風さえ吹く、絶好の競技日和となりました。

競技の結果は、軟式野球 阪大 2ー5 京大、ソフトボール 阪大 11ー10 京大、テニス 阪大 4ー5 京大、バレーボール 阪大 1ー2 京大、卓球 阪大 11ー4 京大で、5連勝中のバレーボールをはじめ、各種目とも健闘し、総合成績は京大の3勝2敗と勝ち越ししました。

競技後、懇親会が開かれ、熱戦の余韻を大いに楽しみました。先生方のご挨拶で、折から開催されていたアトラントオリンピックに勝るとも劣らない試合内容であったとの過分(?)の講評をいただきました。

各監督のスピーチでは、本大会の白熱した競技内容に加えて、昨年度の総合成績が1勝4敗の京大が雪辱を果たした形になったために、勝者側、敗者側とも大変盛り上がり、昼間の競技に劣らない舌戦や、優勝カップによるボールの乾杯が繰り広げられました。

最後に、両校の先生の挨拶で、来年の再会を約束してお開きとなりました。

京大へ帰るバスの中では、いっになく充実した一日であったとの声も学生の中から聞かれ、両大学電気系教室の親睦を一層深めることができました。

本大会は昭和31年に始まり、途中2年の中断を経て、来年は京大側主催で第40回記念大会となりま

す。今年の調子で来年も頑張ります。今年度の調子で来年も頑張ります。今年度の調子で来年も頑張ります。今年度の調子で来年も頑張ります。

(昭和58年卒、吉本昌広 記)

卒業・修了証書

取りに来て下さい

電気工学教室 安陪 稔

このたび、会議室の戸棚の整理をいたしましたところ、別記の方々の

卒業・修了証書が出てきました。教室でお預かりしてありますので、どうぞ取りに来て下さい。本年(平成8年)中は保管させて頂きませんが、来年には処分させて頂きたく、よろしくご諒承のほど、お願い申し上げます。

学士/学位記を未受領の者

Table with columns for graduation year (昭・34), subject (電気工学), name (氏名), and residence (住所). Lists graduates who have not received their diplomas.

博士/学位記を未受領の者

Table with columns for graduation year (昭・44), subject (電気工学), name (氏名), and residence (住所). Lists graduates who have not received their diplomas.

海拔五、三〇〇東と西

松橋達良(昭和17年卒)

坂道を好む方はおられないと思

うが、私も坂道はかなり嫌いな方

三〇〇の土地にそれぞれ立つことになったのも、何かの因縁だったかもしれない。それは、東はペルー・アンデスのチャカルタヨ山塊、西はチベットのシーケーラ峠であった。訪れたのが南半球の1月と北半球の8月といった同じ夏の季節でありながら、一面の雪におおわれた岩だらけの南米アンデスと、雪がなく少し下ればせせらぎが音を立てて流れ水辺に草を食むヤクが群れるチベット高原では、余りに対照的であった。似ていた点と言えば、たまたまなく息が苦しかったこと位であった。

出かける前に登山用具の古道具屋に高度計を求めに行ったところ、学術用の重くて大きく値段の高いのはあったが、携帯用の簡単なものは目盛が皆四、〇〇〇以下で、店の者にどこにお出かけかと訝られる始末であった。仕方なく普通の安い四、〇〇〇以下の中古品を求めたが、結果は、ブルドン管高度計の針が振れ切って一回り半したものの別に壊れもしなかった。

高度順応

減多に立つことのないような高度の土地では、何と言っても高度順応に十分備えておかないといけない。私の場合、アンデスでは海拔三、六〇〇のポリビヤの首都ラパスに1月以上いてからのことであったし、チベットでは海拔三、

五〇〇のラサに1週間滞在していたので、気分は決して良くはなかつたが何とか素人でも耐えられた。アンデス・チャカルタヨ

宇宙線観測所

ボリビヤの首都ラパス(三、六〇〇)の町から裏手の山を500米上って、海拔四、一〇〇の世界最高の商用空港のある台地上がり、そこから35軒、一木一草ないアンデス高原の中を進むとチャカルタヨの宇宙線観測所に達する。ここに前大戦後間もない昭和22年アメリカによって宇宙線観測所が建てられ、昭和30年代にはアメリカ、日本、ボリビヤ三国共同で世界最大の宇宙線空気シャワー検出装置が、山上に設けられた。何しろわが乗鞍岳の観測所の3年分のデータがここでは一週間で採れると言われているのだから、大したものである。

さて昭和37年1月のある日、それまで1月ほどラパスに滞在していた我々は、そこから余り遠くない海拔五、三〇〇のチャカルタヨ宇宙線観測所を見学に行くことになり、ラパス市内で流しのタクシーをつかまえた。ラパスが海拔三、六〇〇もあるからと言っても、そこからさらに一、七〇〇上がった地況も異なる地点に行くとなれば、それなりに大変なことであろうが、運転手は別にそのための用意をす

るとも言わずに簡単に承知した。灌木の一本さえもない。枯れた

刺草の転がり舞う高原の砂漕道を、過給器を付けたボロ車は懸命に走るが、ラパスの市内を走るようなわけにはいかず、しかも不思議にわけにはいかず、しかも不思議によくパンクする。30軒も行くところと一面の雪原に変わって車は動けなくなってしまう。こういうことも知らずにタクシイはよくチャカルタヨ行きを承知したものと少し腹も立ったが致し方ない。高度計の針は五、三〇〇辺りを指していたが、幸いにも雪原の向こうに観測所の建物がぼんやりと見えていたので、タクシイをそこに待たせて足持えもいままに我々は雪原の中を歩くことにした。しかし観測所まで歩くことの辛かったこと、息はずみ動悸は耳許で激しく鳴り、事前の海拔三、六〇〇のラパスの1月の生活も五、三〇〇は通用しなかった。

観測所を見学させてもらい簡単な昼食のものを食べたが、唇の色は褪せ食欲どころの話ではなかった。その時突然外から大声で叫ぶ声が聞こえてきた。何事かと飛び出て見ると、雪の切れ間から北の谷間を越えた向こうに、六、二〇〇の高峰ワイナポトシが青空にくっきりと浮かび上がっていた。夏の季節には滅多なことでは姿を見せない名峰に所員が思わず挙げ

た歓声であった。

このようにチャカルタヨは、夏は雲霧が天空を蔽って四圍の眺望は悪く、緑も勿論全くない。暖気や緑を味あうにはラパス東方100軒の海拔一、五〇〇から二、〇〇〇のユングス溪谷に下るしかないが、アンデスは高いと言っても東か西にこの位行けば高度も急に低くなる点で、チベットとは全く趣を異にしている。南北に走るアンデスは、稜線が高く川の流れも少なく、従って水も緑もないが、東か西に少し振れば高度は急激に下がる。

チャカルタヨには結局何やかやで3時間ほどお邪魔した後、雪原の縁に待たせておいたタクシイでもと来た道を、雪も全くないラパスに戻った。

チベットのシーケーラ峠

ラサに至る

チャカルタヨ訪問から時の流れること22年の昭和59年8月、私は西方チベットの首都ラサにあった。飛行機は四川省の成都を朝発ってチベットとの間をトンボ返りする一日一便であるが、海拔500成都から2時間ちよつとで客を海拔三、四〇〇のチベットのクンガ空港に送り込む。

空港から大河ヤルツァンポ(下流がプラマプトラになる)に上って上ること30軒、唯一この大河にかかる曲水橋を渡り、今度はラサ

ノキ川にそってさらに30軒上ると海拔三、五〇〇のラサに着く。

この頃から早くも頭痛といった高山病の前兆が現れ始め、次の日位からは頭痛は一層昂まり吐き気も加わり、食欲は減退し折角入っても戻すようなことにもなつてくる。勿論部屋には小型酸素ボンベが置かれていて、それから小出しにした革袋の酸素を吸っていればその時は何とかもつが、体調の順応には役立たない。ひどい場合は低地の成都に降ろすしかない。しかし不思議なもので、普通の症状なら辛いのは数日で、その後は突然回復して辛かつたのが嘘のような気分になる。

従って我々は、ドライラマの居城ポタラ宮のある観光の好適地ラサでのゆっくりとした観光で体を高度に馴らした。

青蔵公路

ラサで数日過ごした後、その西方300軒、車で8時間行程のチベット第2の町、パンチェンラマの居城タシルンブ寺のあるシガツェ(日喀則)に向かった。

先ずラサからチベットと青海省を結ぶ青蔵公路を行く。周囲茶一色の山の谷間の小川沿いに進むこと2時間で高原の中の海拔四、〇〇〇の分岐点に達する。ここで青蔵公路とも別れて車は西に進むが、ここまで来ると吹く風は既に冷た

く空気は薄く、行く手正面に横たわる茶色の山塊の背後からは、真っ白な雪峰が青空に突き出ているのが望まれた。

峠の台地

海拔四、〇〇〇の高原台地はなだからで、其の中を細い糸を引いたように砂漠の道が走り、車はさして揺れることもなく砂塵を巻き挙げて走っていく。地況規模が雄大なせいか道は上りにもかかわらず余りそれと気が付かない。そのうちに道は見た目にもそれと判る坂道に変わり、車が右や左に首を振りながら唸りを上げて進むと、あつと言う間にラサ・シガツェ間の最高地点海拔五、三〇〇のシーケーラ峠に着く。

吹く風は一層冷たいが石ころだらけの大地には雪は全くなく、旅の安全を祈る旅人が積み上げた石が塔のように立ち上げられ、そこから四方に張られた綱にはラマ教独特の無数の小旗や経文を刷った布切れが結ばれ、それが強風に千切ればかりにはためいていた。峠に立って周囲を眺めれば、今し方走ってきた道が下に筋のように見え、またシーケーラ山(七、一六二)と思われる白雪の峰が一際高く近く聳えていた。しかし心臓の鼓動は早くも息苦しく、とにかく気分がさっぱりしない。ヤルツァンポ河畔に下る

結局ここに半時間ほど居て、今

度は4時間かけてヤルツアンポ河の海拔三、七〇〇の渡河点まで下っていったが、その途中では海拔四、九〇〇の峠をまた一つ越えた。シーケーラー峠から下りになる道沿いには、海拔四、〇〇〇以上は優にあると言うのにどこから現れたのか判らないが、幅数メートルほどの清らかな水流が音をたてて流れている。そしてその水気を受けて、かなり広い範囲の川原部分一面に青草がびっしりと生い茂り、あの黒い毛を長く垂らしたヤクが点々と草をはんでいるではないか。アンデス高地などでは、これより低い海拔三、〇〇〇の土地でも先ず見られない光景である。チベットが世界の屋根と言われる所以もここにあってはなからうか。将に屋根には水が流れ、アンデスの屏は風を遮ると言うことかもしれない。ヤルツアンポ河の海拔三、七〇〇

シガツエの沃野

この渡河点から河に沿って60軒上流に進むとパンチェンラマの居城タシルンブ寺のあるチベット第二の町、海拔三、七〇〇のシガツ

エに入る。

このシガツエから西のギャンツエ(江孜)にかけてのヤルツアンポ河南部一帯には、海拔四、〇〇〇前後の広大な沃野が広がっている。8月の時点で見渡すかぎり遠く山裾まで、茶色に変わった取り入れ直前の麦穂が波打ち、各所に沼沢が望まれた。太古にチベット高原は一面沼沢の地で、海拔四、〇〇〇を越す世界の屋根の各所に今も無数に残る沼沢はその名残りであるとする学説には、確かに頷けるものがある。なお土地の者に尋ねると、3月になれば夜間の冷え込みは強いが日中は畑起こしができるといふこととであった。南北に長く隆起した幅の狭いアンデス高地と、ヒマラヤの北側に広大な台地のまませりあがったチベット高原は、全てにわたって対照的であった。

企業努力もはや限界

関西生産性本部会長

森井清二(昭24卒)

『生産性を上げれば賃金も上がり、企業も拡大再生産できる』という生産性向上運動の限界が指摘されて久しいが、日本の経済全体

としての生産性は、なお低い。企業努力だけではもはや全体の生産性は上がらず、社会全体で生産性を上げること、別の言い方をすれば、高コスト構造を是正する方法を考えなければならぬ。

われわれから見て流通業などには、『社会的コスト』と映る雇用はある。社会的コストを削減しつつ、全体の雇用を維持するには、高付加価値の独創的な事業を起こすしかない。だが、簡単なことではない。

しかし、『既存の雇用を守るの』で、そのコストは製品価格に転嫁する』という図式は、もう成り立ち得ない。国際競争の中で高い製品が売れるはずはなく、結局人も雇えなくなるからだ。

一時的に吸収できる場所は第三次産業しかないが、その生産性が低い。第三次産業も生産性を上げるとともに、雇用吸収力をつけなければならぬ。(談)

(3月6日朝日新聞より)

大学院重点化による

電機系教室の改組について

洛友会会員の皆様には、いろいろな機会を通じて既にご存じの方も多しと思いますが、年次計画で進められてきました京都大学工学

部の大学院重点化による改組が平成8年度当初の完了しました。

ご報告が遅れましたが、この度の改組でうまれました新しい電機系教室の組織構成につきまして、まとめてご報告申しあげます。

1、学部中心の組織から大学院中心の組織へ

近年の科学技術の目ざましい進歩、発展に伴い、工学がカバーする分野は益々広く、多様化し、自然科学の分野と社会科学の分野との境界領域の分野の研究の重要性が高まって参りました。このよう

な時代の要請に応えるには、従来の各学部の上にそれに対応する大学院があるという、たて割りの組織構成でなく、広い分野をカバーする大学院組織を中心とし、より柔軟性のある研究と教育を行うことが必要です。この度の大学院重点化の改組は、このような考え方に基づいて行われました。

2、改組後の電機系教室の組織

(1) 学部組織

従来からの電気工学科、電子工学科および電気工学第2学科を統合し、電気電子工学科(大学科・定員140名)となりました。

(2) 大学院組織

従来からの電気工学専攻、電子工学専攻および電気工学第2専攻から、新しい電気工学専攻(専任講座1、基幹講座3より構成)、

電子物性工学専攻(専任講座1、基幹講座3、協力講座1より構成)および電子通信工学専攻(専任講座1、基幹講座3、協力講座1より構成)の3専攻に改組されました。専任講座は従来と同様に1つの研究室(小講座)で構成されませんが、基幹講座は従来の研究室が2つ乃至3つ集合した大講座制を採用し、いくつかの専門分野を融合する形で柔軟性のある運用を可能にするものです。各専攻の講座構成を次に記します。

電気工学専攻

複合システム論講座(専任講座) 電磁工学講座(基幹講座) 次の2専門分野で構成

電磁エネルギー工学分野

超伝導工学分野

電力工学講座(基幹講座) 次の2専門分野で構成

電力発生伝送工学分野

電力変換制御工学分野

電気システム論講座(基幹講座) 次の3専門分野で構成

電気回路網学分野

自動制御工学分野

電力システム工学分野

電子物性工学専攻

集積機能工学講座(専任講座)

電子物理学講座(基幹講座) 次の2専門分野で構成

極微真空電子工学分野

プラズマ物性工学分野

機能物性工学講座(基幹講座)
次の2専門分野で構成)

半導体物性工学分野
電子材料物性工学分野

量子工学講座(基幹講座)次の
2専門分野で構成)

光材料物性工学分野
光子工学分野

高機能材料工学講座(協力講座
イオン工学実験施設)

電子通信工学専攻

並列情報処理講座(専任講座)
通信情報工学講座(基幹講座)次の3専門分野で構成)

言語メディア工学分野
マルチメディア工学分野

デジタル通信工学分野
伝送メディア工学講座(基幹講座)次の2専門分野で構成)

電波メディア工学分野
光メディア工学分野

電子回路システム講座(基幹講座)次の2専門分野で構成)

情報回路方式論分野
集積回路設計工学分野

宇宙・地球電波工学講座(協力講座)次の4専門分野で構成)

超高層電波研究センター
超高層物理学分野

宇宙電波工学分野
リモートセンシング工学分野

数理電波科学分野

3、エネルギー科学研究科の誕生

平成8年度より、新しい大学院研究科として、エネルギー科学研究科が発足しました。電気系教室の関連部門では、原子エネルギー研究所およびヘリオトロン核融合研究センターの先生方がこの新研究科に参加されました。なお、平成8年度より、原子エネルギー研究所とヘリオトロン核融合研究センターが統合され、エネルギー理工学研究科として改組されました。以上、遅まきながら、電気系教室の改組の概要についてご報告申し上げます。各研究室の名称が変わり、わかりにくい点が多いかと存じます。教室のほうに、お気軽にお問い合わせ下さい。
(電気工学専攻 安陪稔 昭31年卒)

私達の学生生活 (III)

副会長 近藤文治(昭18卒)

(八)授業(電気化学・中沢教授)

ボイコット事件

電気化学の学生は、2回生の後期で、工業化学科の中沢教授担当の電気化学の講義を聴講することになった。もちろん必修科目である。

修業年限の短縮で、学期の期間が変則的になっていった。確かでは無いが、短い夏休みを終わり、8月20日から新学期が始まり、しかもいきなり学期末試験があることになっていった。私は試験の時間割その他何か注意事項でも掲示されていないかと、18日に学校に行き掲示板を見たが、試験の時間割以外には格別のものはないのでそのまま帰宅した。試験も無事終わり、9月に入って電気化学の講義の日、工業化学の講義室で、中沢教授とはどんな人かなあなど考えながら講義の開始を待っていた。

『オイ 近藤！どうなってるのか聞いてこい。』
『何を言うてるのか！授業はもう済んだ！試験期間中、授業は休みだという規定は工学部にはない。嘘だと思ったら鳥養に聞いてみる！教室主任は岡本かね！』
ど肝を抜かれた。鳥養教授は電気化学の最長老の偉い先生で工学部長だった。岡本教授は電気では鳥養先生に次ぐ偉い先生である。偉いお二人の先生を興奮の余りとは言え呼び捨てである。これには驚いた。開いた口が塞がらないとはこう云う場合を言うのであろう。アツケに取られて言う言葉もない。

『電気化学の講義で先生のお越しをお待ちして……』
と最後まで言い終わらないうちに、『お前か！ さっき電話してきた奴は！』
と大きな声で怒鳴られた。怒髪天を衝くとはこのことであろう。すごい剣幕に圧倒されたが、総代としてここへ来たのだから、このまま逃げ出す訳にも行かない。ヤツとの思いで答えた。

『いいえ、私ではありません。試験が済みましたので、皆、授業が始まるのをお待ちしているんですが……』
『何を言うてるのか！授業はもう済んだ！試験期間中、授業は休みだという規定は工学部にはない。嘘だと思ったら鳥養に聞いてみる！教室主任は岡本かね！』
ど肝を抜かれた。鳥養教授は電気化学の最長老の偉い先生で工学部長だった。岡本教授は電気では鳥養先生に次ぐ偉い先生である。偉いお二人の先生を興奮の余りとは言え呼び捨てである。これには驚いた。開いた口が塞がらないとはこう云う場合を言うのであろう。アツケに取られて言う言葉もない。

『8月20日開講の通知をしたはずだ！』
『開講通知は見えていません。私は8月18日の午後、掲示板を見に来たのですが……』
『そんなことはない筈だ。工学部の事務所に掲示させたが頼りないので、研究室の助手に掲示してあるかどうか、各学科の掲示板を調べに行かせている。掲示がないなどと言うことは絶対ない！』
『でもありませんでした。』

この頃になると、教授もやや興奮が冷めてきたようで、比較的穏やかに私の言葉にも耳を傾けられるようになった。教授の話を伺うと教授がカンカンになって怒られるのも、無理のない話であることが段々判ってきた。教授の話はこうだった。

電気化学の講義は、工業化学科の学生には関係なく、薬学科の1回生と電気工学科の2回生だけの共通科目である。1回生は8月20日から授業で、9月には授業を終わりと、それから試験にはいる。それで両学科に8月20日開講の通知を掲示し講義を始めたところ、第1回目の講義には、電気化学の学生は誰も来てなかった。講義を休講とした。ところが第2回目も誰も出席しなかった。『折角、開講通知をちゃんと掲示してあるのにけ

しからん。もうこれ以上は待てない。』と、腹を立てながら講義を始めたのである。今年も年短縮で時間数が足りないの、止むを得ず夜間数回にわたって長時間補講までして、ヤツと終ったことであつた。

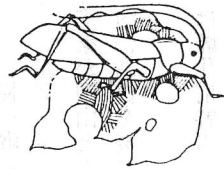
聞いている間に私の方が蒼白になつた。何処で歯車が狂つたのか、われわれにも悪気は全くなかつたのに、結果的には、電気の学生全員が電気化学の講義をポイコットしてしまつたのである。サポータージュである。えらいことになつた！必修科目だから点が貰えなかつたら、卒業できないどころか、入営延期の期間は落第しないで卒業するまでとなつていたので、落第すると学業半ばで兵隊に行かなければならない。私が青くなるのも当り前である。しかも先生は先生の講義の休講、夜間の補講など随分気を遣つて頂いている。ただ欲を言えば、第1回目の講義の後、なぜ教室の方へ注意して貰えなかつたのか悔やまれる。しかし今更そんなことを言つてもしょうがない。ここの処は謝る一手であると考え、

『大変なことになつてしまつて申し訳ありません。先生どうしたらよいでしょうか。悪気は全くなかつたのです。ただ開講通知については何かの間違いがあつたと思ひます。』
これだけ言うのが精一杯であつた。でも今更もう一度電気の学生のために講義をすることはできない。』
教授は、入室時の興奮も漸く冷め、暫く考へてから、
『君、薬学部の方に連絡してノートを借り、それをプリントして皆に配り、勉強するようにして呉れ給え。』
私の声を聞いた心地で、私はホツとして安堵の胸を撫でおろした。
『有難うございます。そうさせて頂きます。』
長居は無用と早々に教授室を退出。皆が待つ講義室に帰り、この一部始終を報告したところ、
『先つき電話したのは事務室や。試験の時間と開講の時間が重なつていたので、講義あるかどうか聞いてくれと頼んだんや。事務室のおっさん怒鳴られよつた。』
ともう一人の総代の言。
『僕はお陰で目から火が出るほど怒鳴られた。あんなに怒られたのは生まれて初めてや。そうならそうと早よ言わんか。』
これで部屋に入った時、いきなり怒鳴られた理由が判つた。それに

しても判らないのは開講通知の件である。教授は通知が貼られているかどうかを、助手に確認させたと言われる。私は確かに見ていない。何かおかしい。どうしても納得できない私は、教室の事務室や友達に聞いて回つた。その結果次のような次第が判つた。私が掲示を見に行つた日、私より先に友達を見に行つた日、私より先に友達一人がやはり掲示を見に来たところ、試験の時間と開講通知の電気化学の時間が重なつていて、当然試験が優先すると思ひ、開講通知を剝して事務室に持参し、適当な処置を依頼したところまで判つた。その後で掲示を見た私の目に開講通知が触れなかつた理由が判つた。私は、電気の事務室が受け取つた開講通知をどう処置したのか敢えて追究しなかつた。講義ポイコット事件は教授のご好意で、私がノートをプリントすると言う少しの努力だけで解決したとだし、追究すれば教授に怒鳴られる犠牲者が私以外に出る可能性がある。怒鳴られるのは私だけで充分である。

かくて前代未聞の講義ポイコット事件は解決した。もし電気の学生が何等かの意図でポイコットしたと誤解されれば、大変なことになるどころだつた。いま思ひ出しでも冷汗が出る事件であつた。偶然、工業化学科の事務長を、私の兄の關係でよく知つていたので、事件の直後、中沢教授に怒鳴られた話をしたら、
『教授室へ直接伺うなどとはもつての他です。隣の助手室を通じて、ご都合を伺つてから入るべきだつたのです。先ず私の処へ来て下されば、旨くして上げられたのに……』
電気工学科と工業化学科とは違うのかと驚いた。しかしよく考えれば、目上の人に会う方法としては当然かも知れない。電気工学科の調子で振舞つたのも怒られる原因の一つであることが判つた。事務長の言葉は更に続いた。
『中沢先生の下で助手が半年間勤まれば、何処の会社へ行つても辛抱と言う点では大丈夫です。』
へえ！、中沢先生はそんなにしつへの厳しい先生とは知らなかつた。しかし先生の温情に接し、私には仲々風格のある大先生と云う印象が強い。

次号へつづく。



関西支部総会

関西支部総会は、本部総会と合同開催で5月25日(土)にホテル京阪京橋にて開催いたしました。今年も、昭和16年卒の大先輩から、修士2回生在学生まで幅広く60名の参加をいただきました。支部総会では、木村陸朗支部長の挨拶に始まり、平成7年度事業および決算報告平成8年度事業計画と予算編成支部役員改選について審議され、満場一致で承認されました。平成8年度の新役員は次の各氏です。

支部長	昭28新 鷲見禎彦
副支部長	昭29 井上和夫
総務幹事	昭40 森本浩志
会計幹事	昭53 湯川英彦

なお、今年の関西支部秋の家族見学会は10月27日(日)に関西電力大飯原子力発電所の見学予定です。支部総会に引き続き、本部総会が別記の通り開催されたあと、会場を移して懇親会を開催いたしました。

本部総会の議論が白熱したため、予定の時刻より30分程遅れましたが、懇親会は大嶋副会長のご発声による乾杯に始まり、立食パーティー形式でグラスを片手に旧交を

温めあいました。途中、西川禪一先生からは昨シーズン日本一に輝いたアメリカンフットボール部(ギャングスターズ)の優勝秘話をお聞かせいただきました。また、大嶋副会長からは景気は十二支とともに12年間で一巡するという経営羅針盤の話をしていただきました。和気あいあいでご歓談いただくなか予定の1時間30分はあっという間に過ぎました。最後に関西支部恒例の「洛友会の歌」の時間となりましたが、今年は近藤文治先生がマイクを握ってリードして下さいまして、先生について全員で斉唱したあと、また来年の再会を誓って散会となりました。

(会計幹事 56卒 尼田賢光記)

四国支部総会報告および近藤先生ご案内同行記

5月31日(金)、高松市内の料亭「新常磐」において第41回洛友会四国支部総会が開催された。本部から近藤名誉教授(洛友会副会長)、教室から松山隆司教授のご出席を頂き、四国内からは39名の会員が集まった。

総会は近藤耕三支部長の挨拶で始まり、四国支部は次第に若手が増えてきており、若手を中心にするます元気にやっていきたい等の

話があった。

次に近藤文治先生よりご挨拶を頂き、来年は京都大学が創立100周年を迎え、再来年には電気工学科が創設100周年を迎えることや、電気工学科の歴史などについてユーモアを交えて話された。また、松山先生からは工学研究科の再編の状況や、電気工学科創設100周年記念事業などについてご紹介を頂いた。

続いて、会務・会計報告、予算案審議が行われた。会務報告では元支部長の藤本悟郎氏(昭10卒)および安芸修氏(昭28卒)が亡くなられたこと、また、四国電力等に5

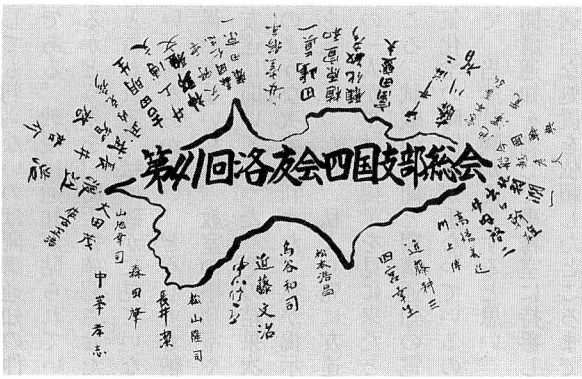


第41回 洛友会四国支部総会 H8.5.31 於新堂盤

名の転入者のあったことなどが紹介された。会計報告、予算案についても審議はスムーズに進行し、満場一致で承認された。次に支部役員の改選が提案され、4年間にわたり幹事を務められた願化敏彦氏(昭43卒)が退任され、新幹事に山地幸司氏(昭48卒)が選任された。

以上をもって、総会は無事終了した。引き続き懇親会に移り、先生方との歓談や久しぶりに顔を合わせた先輩・友人と酒を酌み交わしながらの談笑など、楽しいひとときを過ごした。最後に、全員が肩を組み、恒例となった「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の合唱で懇親会を締め括った。

その後、松山先生を始め有志一



同は街に繰り出し、電気工学談義に花を咲かせ、また、自慢の喉を披露しあい、深夜まで親交を深めた。松山先生はご実家が岡山とのことで、その日の内に高松を後にされた。

下に見渡せる高松の街並みを、20年ほど前に来られたときとお比べになられ、その変貌ぶりに感慨に更けられているご様子であった。その後、久しぶりに訪れた料亭「郷屋敷」の庭を懐かしみながら、讃岐名物のうどんに舌鼓を打たれた。夕刻には京都で退官記念パーティに参加されるので、観光の疲れもお見せにならず、元気に高松を後にされた。この日は近藤先生のお誕生日ということで、高松での一日が良い思い出になって頂ければ、四国支部としても幸いです。

翌日、近藤先生は願化前幹事と鳥谷和司(昭60卒)の案内で、四国村、屋島を観光なされた。四国村では、全くの偶然ながら留學生と同行することになり、一緒に様々な文化財や史跡を見て廻った。近藤先生の流暢な英語の説明に、留學生は大変感激した様子だった。

屋島では、頂上の展望台から眼

(昭和60年卒 鳥谷和司記)

平成8年度洛友会

東京支部総会 および評議員会

平成8年度の東京支部総会は、6月7日(金)東京目黒の八芳園にて開催されました。当日は平日ということもあり、出席人数がどの程度となるか一抹の不安がありました。昭和9年の大先輩から昭和56年卒の会員まで、総勢60名弱の会員の出席がありました。本部からは、近藤文治副会長、教室から安部稔教授を来賓にお迎えしました。

支部大会は伊藤委員長の挨拶で

始まり、平成7年度の行事報告、決算報告を行い承認されました。引き続き平成8年度の新役員を選出し、萱島新支部長の挨拶に続いて平成8年度の行事計画と予算が審議され承認されました。その際、種々の活動への参加者の増加など活動の一層の活性化を図る必要があること、健全財政を維持する必要があることなどの指摘があり、努力が必要であることを確認しました。また今年度に米寿、喜寿を迎える18名(米寿7名、喜寿11名)のお祝いを行いました。ご来賓の近藤副会長からは、百周年行事から会費納入率に至るまで洛友会の近況などについてユー



モアあふれるお話を頂きました。また安部教授からは、大学院大学の説明や学生諸氏の最近の就職情勢とともに、百周年記念行事の概要について詳細なご説明を頂きました。恒例の総会後の懇親会は萱島新支部長の挨拶で始まりましたが、その後、あちらこちらで会員の輪ができ、旧友の間の、また新旧会員の間での会話が盛り上がりつつありました。今年からの新しい試みとしてビンゴゲームが行われた後、なごりはつきないものの、長野勇様(昭和31年卒)の挨拶にて閉会となりました。また出席者のうち一部の方は連れだつて二次会にむかわれたようでした。

総務幹事 七原俊也(昭和52年卒)

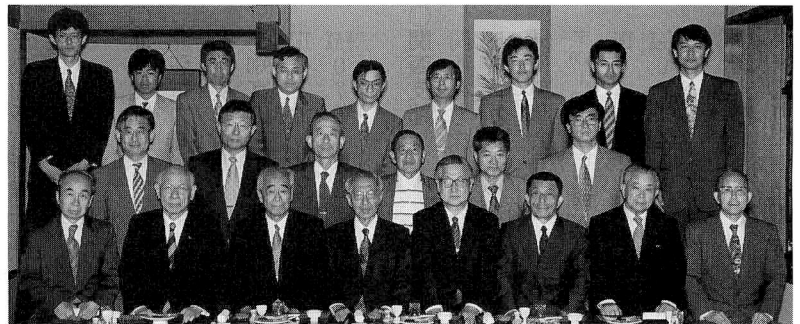
北陸支部総会

さる6月15日富山市「川柳」において、平成8年度の北陸支部総会を開催しました。本部からは近藤副会長、教室からは田丸啓吉先生をお迎えし、合計23名が集まりました。

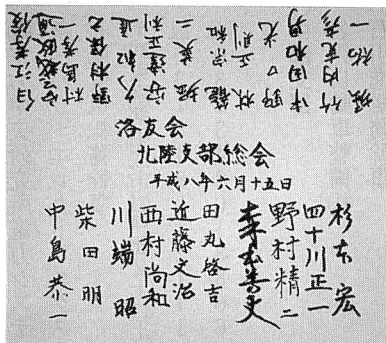
総会は、川端支部長のご挨拶で始まり、支部近況報告、会計報告と続いた後、支部役員改選案について審議され、満場一致の承認を得て、新役員が選出されました。新役員を代表して、西村新支部長からご挨拶をいただき、審議事項を終了しました。

次に、近藤副会長からご挨拶いただき、会員・会費納入状況、大谷および電気工学科創設百周年、大谷会長の近況などについてお話を伺いました。田丸先生からは、教室の近況として各講座の動向について説明いただき、また、電気工学科創設百周年記念事業への協力の依頼がありました。

総会終了後、引き続き懇親会に入り、葉膳を取り入れた料理に舌鼓を打ち、先生方や先輩、友人と酒を酌み交わしながら歓談し、楽しい一時を過ごしました。最後に恒例となっている逍遙の歌と琵琶湖周航の歌を合唱し、万歳で散会



京都大学洛友会北陸支部総会 H8.6.15 於川柳



となりました。

翌日、近藤副会長と田丸先生は合掌造りで有名な五箇山方面へお立ち寄りになり、合掌造りの重要

文化財・村上家にて説明を伺った後、世界遺産に指定されたばかりの相倉合掌集落をご視察になりました。帰途、欄間などで有名な井波町の木彫り細工もご覧になり、JR高岡駅よりお帰りになられました。(昭和55年卒 白江孝俊記)

中部支部総会

中部支部の平成8年度総会は6月22日16時から、名古屋駅前の名鉄グランドホテル・アイリスの間で開催されました。本部・教室から近藤副会長、安倍教授のご出席をいただき、支部からは今年白寿を迎えられた大正13年卒の本多顧問を始め14名が参加しました。

大野支部長の挨拶の後議事に入りました。まず支部役員については全員留任とし可決されました。次に平成7年度事業および会計報告並びに平成8年度事業計画と予算案が一括してはかられ、満場一致で可決されました。

事業計画は中部支部事業計画をご覧下さい。7月6日(土)の囲碁大会には本多顧問も参加されました。本多顧問は10年前の、卒寿棋譜の続編・白寿棋譜を出版されました。家族同伴「秋の例会」は中部支部としては初めての遠出、「京都」にしました。大徳寺総見院の

特別公開が見られます。奮ってご参加下さい。

総会について、近藤副会長から大谷会長のご近況、本部動向説明があり、引き続き「再来年の電気教室開設百周年に因み、昨年10月1日現在の卒業生の調査をした。総数は六、九九九人、物故者、不明を除き現在の洛友会会員数は五、五六五人とのご説明、更に会費納入率が50%を割りそうになり、いろいろお願いしてやっと60%に回復した。」と、会費の納入と2年後の記念行事の寄付について協力要請がありました。続いて安倍教授から教室の近況、就職状況について百周年記念事業についての詳細なご説明があり、懇親会に入りました。

懇親会では百年に一度の記念事業に巡り会える奇遇に、昔話の花が咲きます。本多顧問につぐ長老のT15年卒田中卓次氏が、「神鋼電機では青柳先生から林重憲先生と、そして現在の近藤副会長にお世話になってきた」とのお話にて、S11年(講習所)卒の久須美寿一氏が、「我々の講習所はS15年に廃止され、会員は減るばかりでした。そのデルタ会の面倒を見ていたのが重憲先生とその後継者の近藤副会長です。」と話題は尽きません。本月初参加のS29年卒の地主利男氏から重憲先生の囲碁秘

話(あれだけ理論的な先生が若はあまりお強くなかった、負ける事が嫌いで負けると勝つまで、勝負は深夜に及んだ)のご披露がありました。続いて恒例の近況報告、懇親会の話ははずみずみず。

午後7時、名残は尽きませんが来年の再会を約して散会しました。総務幹事石川進記(昭和26年卒)

北陸支部役員改選通知

平成8年度北陸支部総会において左記の通り役員の改選がありましたので通知致します。

顧問 昭5 金井久兵衛(留任)

7 西岡敬二(留任)

16 森本芳夫(新任)

24 野村精二(留任)

28 川端 昭(新任)

支部長 昭23 西村尚和(新任)

副支部長 昭28 新村本 浩(退任)

昭39 羽場保弘(新任)

40 中島恭一(新任)

評議員 昭9 篠原一恭(退任)

28 新杉本宏(新任)

29 堀 英二(新任)

40 金森 治(留任)

40 院柴田 明(新任)

41 宮城政通(新任)

46 西念 勉(留任)

幹事 昭46 院安達正利(新任)

47 久和 進(新任)
51 堀 祐一(新任)
55 白江孝俊(退任)
57 竹内克彦(新任)

四国支部役員改選通知

平成8年度四国支部総会において左記の通り役員の改選がありましたので通知致します。

記

支部長 昭28 近藤耕三(留任)

副支部長 昭29 井上博之(留任)

幹事 昭41 修川上 博(留任)

41 森田 肇(留任)

43 願化敏彦(退任)

48 山地幸司(新任)

事務局だより

各地区の会員の皆様へ

平成8年度洛友会支部へのご連絡は次のところへ!

○北海道支部

池内義則支部長宅

〒063 札幌市西区西野61-5-3

TEL 011-661-8245

○東北支部

東北電力(株)本店情報通信部

伊藤篤幹事

〒980 仙台市青葉区荒巻三居沢16
TEL 022-2225-2111

○東京支部

(財)電力中央研究所電力システム部、パワーエレクトロニクスG

七原俊也総務幹事

〒201 東京都狛江市岩戸北2-11-1

TEL 03-3480-2111

FAX 03-3480-3866

○中部支部

名鉄自動車整備(株)

石川進総務幹事

〒478 知多市新舞子竜12-33

TEL 0569-42-2205

○北陸支部

北陸電力(株)企画室

竹内克彦幹事

〒930 富山市牛島町15-1

TEL 076-441-2511

FAX 076-443-9979

○関西支部

関西電力(株)、お客さま本部ネット

トワーク技術グループ

湯川英彦会計幹事

〒530 大阪市北区中之島3-3-22

TEL 06-441-8821

FAX 06-441-7226

○中国支部

中国電力(株)工務部

池本克行庶務幹事

〒730 広島市中区小町4-33

TEL 082-242-6423

FAX 082-242-5984

○四国支部

四国電力(株)電力部

山地幸司幹事

〒761 高松市丸の内2-5

TEL 0878-21-5061

FAX 0878-26-1074

○九州支部

九州電力(株)企画部

深堀慶憲

〒810 福岡市中央区渡辺通2-1-82

TEL 082-761-3031

FAX 082-733-1435

○本部事務局

(財)応用科学研究所内

松本 博

〒606 京都市左京区田中大堰町49

TEL 075-701-3164

FAX 075-701-1217

編集後記

記録的な今夏の猛暑も今では金木犀の香が漂い、京都の町も落着きを取り戻し、秋の紅葉を待つばかりとなりました。

会員の皆様にはお元気でお過ごしのこととお慶び申し上げます。

本10月号には、驚見関西支部長様より巻頭言を寄稿頂き有難うございました。

地球環境に配慮しつつ、安全操業に並々ならぬご苦労が感じられました。また、佐々木先生を始め多くの会員の方々からもご投稿頂き、お陰様で第177号が予定どおり発行できました。

会報をお借りしてご挨拶を申し上げます。本号より事務局の交替により、松本博が担当いたします。不馴れですが会員の情報交換の一翼となれるよう心掛けますので宜しくお願い申し上げます。

早々に事務局からお願いですが、洛友会活動の源泉であります年会費の納付について、会員の皆様の幅広いご寄稿をお待ちしておりますのでよろしく。

(事務局 松本博記)

計報

昭4 斎藤亥三雄 8.7.10
昭5 瀬川 量
昭5 平田憲一 8.7.10
昭7 藤野千代治 8.4.1
昭16 伊藤久照 8.3.3
昭29 村田計枝 8.7.5

以上の方々のご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。